

## 近世における源信と母の説話について

北 城 伸 子

### はじめに

近世の説話をめぐる研究は、近年に至って活発化してきた。これまで特に近世は仏教説話が終焉を迎えた時代だととされてきたが、出版文化の隆盛により説話集がさかんに版を重ねられたこと、あるいは寺檀制度が徹底され、多くの人々に仏教的思想が浸透したことなど、さまざまな観点からみて、徳川期は実は広く仏教説話を受け入れた時代ではなかったか、という見解が呈示されている<sup>①</sup>。実際、読本や草双紙といった文芸作品、あるいは歌舞伎や浄瑠璃といった近世芸能のなかに、主題そのものを仏教説話から取材する例は枚挙に暇がない。しかし残念なことに、そうした作品群を前代から続く仏教説話史のなかで位置づける、

という方法はあまりとられていないのが現状ではないか。

筆者は、特に近世仏教説話のなかでも高僧の生涯を描いたものに注目してきた。これらを概観していて驚かされるのは、そこに描かれる高僧たちの説話が実に生き生きとした人間像を結んでいることである。そこには崇高なイメージを伴う神秘的な逸話だけでなく、時には道化役として周囲に笑いをふりまき、時には悲劇の主人公として人々の涙を誘う、実に人間的な姿が描き出されている。艱難辛苦の果てに道を開いていく高僧たちの生涯に、多くの人は自らの生を重ねあわせていくつも抱いたであろう。この時期における高僧伝の特徴として挙げられるのは、人智を超えた逸話によって形成される宗教英雄の一生涯というよりも、一人の人間が悩み苦しみながら成道していく過程

を描くことに主眼が置かれる点ではないだろうか。

わが国において浄土信仰の宣布につとめた横川僧都源信(九四二—一〇一七)の説話についても、例外ではない。

源信の説話・伝承は数多く残され、またその生涯を綴った伝記資料も多数残される。こうした源信の一代記説話ともいべきもののなかで知られているのは、源信が宮中の法華八講に招かれ、その下賜品を母にもとへ贈ったところ、母から名利を得させることをねがって出家させたのではないと厳しく戒められたという一話であろう。この話は『今昔物語集』巻一五—三九をはじめとして、『発心集』七、

『三国伝記』一、『私聚百因縁集』八にも同話がみられる。特に今昔に収録される一話に関しては、早く西尾実氏によつて「人間の心情を深く掘り下げて新しい宗教世界を開くために母子が生涯かけて協力した、いわば心情的協力態勢が築かれた話」<sup>③</sup>として特徴付けられ、また、さらに西尾光一氏は「宗教のさびしさと、人間の暖かさの融合を描出した、すぐれた宗教的な文学」<sup>④</sup>とし、ともにこの作品に対して高い評価を与えられた。この説話は室町期に至ると源信の一生涯を主題とした御伽草子『恵心僧都物語』に取りあげられ、多くの諸本が生み出されていく。興味深いのは、さらにこの話が近世以降に至っても、様々な文献に脈々と

書き継がれていることである。そこで筆者は十七世紀以降に展開した源信の一代記とそれらを構成する説話を整理・分析し、高僧伝の展開史上で捉えようと試みた。しかしながら今回調査に及んだのは膨大な源信伝のごく限られた一部であり、いまだ未見の文献も数多く残している。したがって本稿は、これまで披見した資料を一旦整理するという意味での中間報告となる。諸先生方より多くのご教示をいただければ幸いである。

### 1. 徳川期の源信伝と源信の母の説話

源信の伝記については、早く宮崎円遵氏によつておおむね整理がなされており、特に近世以後に成立・出版されたものとして五種の伝記が紹介されている。<sup>⑤</sup>ところが宮崎氏は、源信個人の伝記的事項を一代記にしたてた所謂〈別伝〉を主な考察対象としており、複数の僧伝を編纂する〈叢伝〉所収の源信伝についてはあまり言及されていない。そこで管見の限りで叢伝に収められた源信伝を調査したところ、新たに次の三種が数えられた。

#### 【ア】

『天台山恵心院源信法師伝』(東国高僧伝 卷六)

高泉性激編 貞享四年(一六八七)刊

『大日本仏教全書』一〇四所収)

『江州叡山沙門源信伝』(本朝高僧伝 巻十)

元師蜜編 元禄一五年(一七〇二) 自序

『大日本仏教全書』一〇二所収)

【イ】

『源信僧都伝』(三國七高僧図会 本朝之巻)

杓杞庵一禅編 松川半山画 万延元年(一八六〇) 刊

『帝國文庫四四 仏教各宗高僧実伝』所収)

ここで大きく【ア】【イ】の二種に区別したのは、【ア】が史伝的なものであるのに対し、【イ】は在俗の徒が娯楽的な読みものとして楽しむために刊行されたものとを区別したためである。宮崎氏の報告とこれらの伝記類を含めると、現段階で近世の源信伝は大まかにⅠ(史伝的なもの)、Ⅱ(七高僧伝の一部として編纂されたもの)、Ⅲ(母との交流を主題とするもの)の三つの流れに分類することが出来る。<sup>⑥</sup>

最初に述べたように、御八講の際に源信が帝より衣を賜り、それを母のもとへ送ったところ、名利を得させるために出家させたのではないと諫められる話は、近世の伝記資料のほとんどにおいて確認することができる。したがって、この時代に至っても源信伝のなかの逸話としてはかなり知

られていたと想像出来る。しかし『天台山恵心院源信法師伝』『江州叡山沙門源信伝』などには、この話は収録されていない。これらのように、明確な歴史意識をもって編まれた、いわゆる「正統僧伝」とも言うべき史料においては、真偽の定かでないような説話を収録するわけにはいかなかったのだろう。後述するが、幕末に至って天台真盛派が源信伝を開版するにあたっては、この説話を含めて様々な歌集や説話集から多くの俗伝ともいべき記事を引用している。このことは僧伝の質が時代ごとに変容していく様子を物語っているようで興味深い。

次に伝記資料以外に目を転じ、民間で記された随筆類に記された母との交流を主題とする説話を確認してみたい。源信と母とのやりとりに関しては、例えば『袋草子』三・四七や『発心集』六・一二八などに収録される源信が和歌を狂言綺語と退けて詠まなかった話などとともに(『本朝語園』三・一四、『にぎはひ草』下二二二)、十七世紀以降に書かれた随筆類に度々紹介されている。

元禄年間に書かれた随筆『塩尻』には、源信と母との交流を次のように記している。

恵心僧都、勅によりて参内し称讃浄土経を待講申されければ、叡感のあまり本尊香炉及び御衣を賜はりしか

は、古郷なる母公の方へ御衣を贈られし返事に、是を榮とし悦とする心、中々にうらみられし。其文の中に

〈中略〉

またたまはり候御衣はいかにしたる御はからひそや、既に如法如説の聖さへ布施にうたれては地獄にこがさる、とこそ申に、称讚浄土経しようどくの御布施の御衣此あまかとりて何とすへきや、後世たすくる迄こそなくともかへりて三途に引落したまふへき事あさましとも申すへきやうなくと手にもふれしと思へは此儘法師に返し候云々取意略文

〈後略〉

〔引用は『日本随筆大成』第三期一〇、二六六―二六七頁による、句読点筆者。〕

同じ話は、幕末に出版された『皇都午睡』（嘉永三・一八五〇年刊）にも紹介されており、伝記以外においても、源信の逸話としてかなり知られていた話題であったことが推察できる。

この話が早くから流布していたことは、すでに室町期に源信と母との交流を主題とする『恵心僧都物語』が成立していたことから知ることが出来る。この諸本については松本隆信氏によって、【A】『恵心僧都絵巻』と題され詞書と

ともにもともと絵を有していたもの、【B】『恵心僧都物語』と題され絵を有さないものの二系統に分類されており、さらに黒田彰氏や中世絵巻研究会によって【B】系統に数多くの書写本が存在すると報告されている。今回調査した限りでも、新たに大谷大学図書館に所蔵される『恵心僧都縁起』の存在が明らかになったので、今後も新たな諸本が見つかる可能性が高い。内容的に見ると、【A】はいくつかの断片的な説話によって全篇が構成されるのに対し、【B】は源信の出生から往生までの行状を、特に母との交流を主題として描く。また【B】間の本文の異同については、全体的にそれほど大きな隔たりはない。成立に関しては、【A】の諸本は応永八年の奥書があり、早ければこの頃にも成立したと推定できるが、【B】ではそれに先立つ書写年代をもつものがない。加えて、これまでの研究においては【B】系統の諸本のうち岡田本が真宗独自の読み癖を残すこと、大谷大学所蔵本の表紙の裏書に旧蔵者として真宗寺院蓮光寺の什物である旨が記されていること、もともと真宗僧・天然が書写した談義本として残されていたこと<sup>⑭</sup>からすると、【B】系統はとりわけ真宗と深く関わりをもつて伝承されていた可能性が高いと指摘されている。新出資料もあわせ、【B】系統の諸本のなかで書写年代が明

確なものななかでは大分県專想寺本がもつ「文明三年」(一四七二)というものが古く、滋賀県善立寺本の「元禄三年」(一六九〇)がもつとも新しい。したがつて少なくとも十五世紀後半から十七世紀後半まで、じつに二百年の長きに渡つてこの説話が伝えられていたことがわかる。

## 2. 母の詠歌をめぐつて

幕末の随筆『皇都午睡』は源信の母の説話を紹介するが、注意深く読むと諸伝記や他の資料には見られない母の和歌を収載していることに気づく。

### 恵心僧都

源信僧都、博学殊勝の名高く、禁庭にめされて僧都に任ぜらる。源信法力の高きを悦びて老母のかたへ文を認め、任官の名譽を告らる。嘸母の悦び給ふべしと推せられしに、老母、殊の外此事を恨み歌を詠て送られる。

後の世を法の橋とも頼みしに世渡る僧となるぞ悲しき

源信此歌に感じて富貴を願はず、唯貧窮ならではほだい心も怠たると語り、仏像を作るにも此尊体の仏力によつて、信心の人貧乏ならしめんと念ず。故に源信の

作仏を所持して念ずる人は貧賤也とかや。源信は世に云恵心僧都の事也。

〔新群書類聚〕第一卷、六九〇頁、句読点・傍線筆者)

これに類する和歌は、伝記資料の【A】系統本文において確認することが出来る。例えば【A】①国立国会図書館本においては、

恵心僧都、年高き母を、持給へり、志はふかしと、いへとも、かなはざる世間にて、おもふはかり、孝することもなく、過給ける程に

あるところに、導師に請せられて、布施などおほく、取給たりければ、悦て、をむは、のもとへ、隨身し給へり

この母、何に、喜給はんすらむと、思程に、此財宝をうちみて、なかれければ、心えず、若は、うれしさのあまりかと、おもふほとに、とはかりありて、母の云法師子を持ては、我後世をも、たすかるへきかこそ、資もしく、おもひしに、おやに、かゝる地獄の業を、見せらるへきこと、は、夢にも思はさりきとて

きみをこそ、法の橋とは、たのみしに、世わたる人と、なるそかなしき

と、云もやらす、なかれければ、是を聞て、僧都はこ

とに発心し給ける、ありかたきことなり

〔室町時代物語大成〕三卷、十九頁、傍線筆者

とあり、②妙法院本③藤井隆藏本といった絵巻諸本においても措辞の違いはあるものの、ほとんど同じ一首が見えている。それに対し、【B】系統で和歌を載せるのは大谷本『恵心僧都物語』のみである。

……御使此御文と御衣を給はり、母御前に奉る。御文を披き御覽して、さめ／＼と泣給へり。御使をはしめ見る人思ふ様「実に理りなり。未幼少にして一天に名を挙面目を東西に施給へる悦はしさの遣方なくして泣給ふよ。」とおもひあへり。然るに良久しくして、使者に告て云「汝僧都の御坊へ委く語り奉れ。自か本意を背給ふ。恨しければ態と御返事は申さぬぞ。詞にて申へし。かゝる憂世の一旦の世路をはこくまれんと思は、男になし父の跡をこそつかせて心安くそひ奉るへき身なれ共、片時も離れたき恩愛の懐を出し多年に及へり。朝暮に恋しく思ふこと御心より切なり。されとも永き闇路を助訪ひ給ふへきのみこそ本意なれ。一分の悟りもなき愚なる女の身に空しく信施を受ん事なし。御志の御衣は速に返し奉る。対面の事は是より申へき時ありと語れ。」とて一首の哥をそ送られける。

後の世の法の橋とも頼しに世わたる僧と成そかなしきとそなされて使に給はりて、さめ／＼と打泣給へり。

〔大谷本『恵心僧都物語』、『駒沢国文』二二一号、二二九頁より引用、傍線筆者、尚校合部分に関しては省略した。〕

ここにおいては、出世を誇る源信の態度を歎いた母が「後の世の法の橋とも頼みしに世わたる僧と成そかなしき」という一首を詠んだ、としている。【A】系統の和歌とは初句が異なるものの、ほぼ同じ一首が確認されることから、これまで中世説話・絵巻研究会は大谷大学本と室町期に製作された絵巻類との交渉があった、という点を指摘されている<sup>⑬</sup>。

しかし大谷本に先行する【A】系統の絵巻類は現在確認される限りで①国会図書館本②妙法院本③藤井隆本の三本と比較的数が少ないことからすると、大谷本と絵巻の交渉を考えるにあたっては今一度慎重に検討を加えねばならないように思う。

むしろ大谷大学本の本文には、物語の結末に近い場面で源信が母の往生に際し善智識となるくだりがみえるが、その際に示される源信自身の往生観は、【A】系統のものとは全く異なることに注意したい。国立国会図書館本をはじめとする【A】系統の諸本では、源信が往生について述べ

る場面で

或時、つらくおもはく、われ、かくのこごとく、人に勝て才智を求事、仏意には、よも叶はし物を、其上、我、無双の智慧を得たりとて、今世に、いくはくかあらむ、電光朝露の命なれば、明日を期しかたし、唯、極楽にたに、生れなは、身心を、費さすとも、須臾剎那に、一切の智をも、得へし、しかれば、た、偏に、後世の、勤を致して、往生を願はんといふ心、忽然として、おこりき

〔室町時代物語大成〕三卷、十九頁、傍線筆者

と、極楽に生じた時点で、何らかの修行を修することなしに即座に悟りが得られると説くのに対し、大谷大学本にあつては

今生こそ父母にともなふ縁うすくとも、来世にては一仏浄土にと契給ひし上は、此世に心をと、め給はず。

いそぎ浄土に往生し、九品のうてなの上にして、母御前を見奉り弥陀を拝し説法を聞へしとて、往生の行おこたらすして、寛仁元年六月十日御年七十六にして入滅し給へり。

〔駒沢国文〕二二二号、二二三頁、傍線筆者

と、浄土往生は阿弥陀の説法を聞くためのものであり、悟

りを得るまでのひとつの段階にしかすぎないとする。これらの点から考えても、大谷本のみが絵巻諸本と直接の交渉関係にあった、とするより、むしろ伝承母胎となった思想的背景の異なりを含めて、両者の和歌の違いを検討する必要があるのではないだろうか。

### 3. 源信説話と往生要集の注釈書

ところで、母との交流を描いたもの以外で源信に関する説話に注目すると、全国諸寺院に点在する伝源信作の仏像の縁起・由来、あるいは地獄極楽の様相をこの世に伝えるといった説話が数多く語り継がれているのが目に付く。源信と地獄をめぐる説話の展開背景に、源信選の『往生要集』の民間への浸透があつたということは改めて言うまでもない。<sup>⑩</sup>徳川期の『往生要集』は和文・絵入りのものも含めて多くの版が重ねられ、宮次男氏によれば、寛文一一年本、元禄元版寛政本、寛文元版天保版、嘉永再刻本の四種、さらに各本に数種の再刻本があるとの報告がある。<sup>⑪</sup>

それに伴い、各宗からは『往生要集』に関する注釈書が多く世に出された。写本を含めると膨大な諸本が存在するが、『仏書解説大辞典』によって刊行されたもののみ左に挙げる。

《徳川期に刊行された『往生要集』の注釈書》

〈イ〉寛永三年刊 往生要集鈔 良忠 正治元

弘安(一一九九―一二八七)述

〈ロ〉寛永一八年刊 往生要集義記 良忠 正治元

弘安(一一九九―一二八七)述

〈ハ〉天和三年刊 往生要集指磨抄 廓宝 元禄八

(一六九五)述

〈ニ〉延宝二年刊 往生要集直談 羊歩 慶長一三

(一六〇八)述

〈ホ〉元禄十年刊 往生要集補闕正文 洞空 正保二

宝永四(一六四五―一七〇七)記

〈ヘ〉正徳三年刊 往生要集和解 明空

こうした注釈書には、各書に選者源信についてかなり具體的な伝記事項が記されている。例えば〈ロ〉寛永一八年刊『往生要集義記』には源信の出自や誕生の奇瑞、往生にいたるまでを『法華験記』などの伝記を引用しつつ、選者源信に関して詳細な注釈を施す。〈ロ〉は浄土宗第三祖である良忠によるものであり、早い時期からこうした注釈書に源信の伝記が付随していたことがわかる。時代が下り、俗耳に対して平易に解説した書物が編まれるようになると、こうした伝記的事項に限らず、様々な説話が引用されるよう

になる。〈ニ〉延宝二年(一六七四)刊『往生要集直談』(以下、『直談』)は比較的容易に書かれた『往生要集』の注釈書だが、〈ニ〉が特徴的なのは他の注釈書にはない源信の母にまつわる説話がみえている点である。

この資料には村上天皇の御時のこととして、源信が宮中に招かれ御八講の講師となった褒美として衣を下賜され、それを母のもとへ文とともに送ったところ、やはり名利を得させるために出家させたのではない、と戒められたという一話が見えている。

：去程二、村上天皇ノ御時、天曆十年六月二十一日ニ、清涼殿ニヲヒテ、五日十座ノ御八講ノ導師ヲツトムヘシ、就<sub>レ</sub>夫件ノ小兒ヲ相俱テ参内スベシト、慈惠僧正ノ方ヘ勅使ヲ立玉フ。因テ茲ニ、慈惠大師小兒ヲ相俱シ、参内シ玉フ。去ハ御八講ノ導師ヲ彼ノ小兒ノ御房ニ仰セ付ラレ玉フ。恵心難<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>止<sub>ラ</sub>故ニ高座ニ座シ、五日十座ノ勤行ヲ修シ、法華八軸ノ中ヲ論題ニアゲテ、是非ヲ判シ玉ヘリ。古今未聞ノ導師ナリト、見聞ノ諸人感セサルハナシ。其ノ時天子恵心ノ作略ヲ感シ玉ヒテ即御衣ヲ賜ハラセ、即恵心ノ僧都二任シ玉ヘリ。誠ニ時ノ面目、世間ヘ何事カ如シヤ<sub>レ</sub>之ニ。去程二恵心ハ御衣ヲ頂キ玉ヒ、此事ヲ母上ニ告シラシメ喜



ハシメント、御衣ニ文ヲ認メテ大和国へ使シ玉ヘリ。  
母上文ヲ開玉ヒ、御衣ニ返状ヲ添テ、恵心ノ方へ使シ  
玉フ。恵心返状ヲ開キ見玉フ、其文ニ云ク

其身ヲ登山ナサシムル事ハ、父ノ菩提ヲ用ハシメ、兼  
ハ又、母カ生死ノ愛河ヲ渡ルヘキ、法ノ橋トモ頼ムヘ  
キタメナリ、聞ナラク、夫レ出家ト云ハ、名聞等ノ家  
ヲ出ルト、然ルニ御身ハ、御八講ノ導師ヲツトメ、天  
子ノ御衣ヲ賜ハラセ玉フコトヲ、普天ノ下ノ誉ノヤウ  
ニ思ヒ給ヘリ、御身ヲ人ニホメサセタク思ヒ侍ヘラハ、  
父ノ跡ヲツカセ、馬ニ乗テ、軍陣ニテ高名ヲキハメテ、  
誉ヲコソトルヘケレ、君ハ名聞ヲ本ト思ヒ玉ヘル故ニ、  
天子ヨリ賜ハラセ玉フ御衣ヲ、古今未聞ノ手柄ノヤウ  
ニ思ヒ給フ、ウラメシト即一首後ノ世ノ法ノ橋トモタ  
ノミシニヨワタル僧トナルソカナシキカク詠ジ玉ヘリ  
(引用は大谷大学図書館所蔵本『往生要集直談』延宝二年版  
句詠点・傍線筆者)

注目すべきなのは、ここで母が「後ノ世ノ法ノ橋トモタ  
ノミシニヨワタル僧トナルソカナシキ」という一首の歌を  
送つたとある点である。この和歌は先に挙げた大谷大学本  
の一首とはば一致している。大谷大学本が書写されたのは  
宝暦年間<sup>16</sup>、大谷本のもとになったと指摘されている絵巻類

は応永八年以降の成立であるため、成立年代からすれば、  
大谷大学本が絵巻を参考する以前に、延宝二年に刊行され  
た『直談』を目にした可能性はまったく否定できるもので  
はない。

しかし、かといって大谷大学本が『直談』と直接の書承  
関係にあった、とするには性急であるように思われる。  
【B】系統の諸本間であって、大谷大学本にはいくつか他  
本と異なる箇所がある。<sup>17</sup>そうした部分と『直談』を比べる  
と、さほどの一致はない。例えば、左のように他本では、  
源信が宮中に招かれた年を「十三」とするのに比べ、大谷  
大学本では異なっている。

：天曆十三年六月廿一日於テ清冷殿ニ五日十五座ノ  
御(八)講有可由侍ニ、主上此人ヲ被テ聞召勅ニ僧  
正ニ、件ノ小僧相具シ今度ノ(八)講可被勸侍レハ、僧  
正モ面目アテ召具ノ参内ス。御年十三ノ事ナレハ花ノ姿  
厳ク、羅睺羅尊者ノ古ヘモ是ニハ争カ可増。

(大谷大学蔵本『恵心僧都縁起』、傍線部筆者)

：然は村上天皇の御時、天曆十年六月廿一日より清涼  
殿におゐて、五日に十座の御八講有けるに、此新発意  
の事一天の君聞召て、慈恵僧正に勅あり。(中略)未  
十五に成給ひければ、容顔嚴羅睺羅尊者の古しへも、

是には争か増るへきと覺へたり。(中略)

(大谷大学蔵本『恵心僧都物語』、『駒沢国文』二二号、二二八頁、傍線筆者)

これらに比べて先に引用した『直談』では、源信が御八講に参座した年齢はまったく触れられていない。また源信が母との対面を許されずに歎く場面でも、他本では

：僧都モトヨリ智恵深キ道心ニテ御座ハ、母ノ御心中ヲ思ヒ遣テシメ、ト涙ヲ流シ宣フ様、「我母尋常ノ女人ニテハ御座ス権者ニテ渡リケリ。夫レ親ノ子ヲ思事者、畜類鳥類ナラ疎レ不。況ヤ人倫ニオイテヲ哉。我竹馬ノ比、恩愛離別ノ後七ケ年カ間互ニ見奉ラサレハ、進ミテモ可キニ対面シ玉フ、加程迄密仰有テ、剩へ御返事ニモ不預、御衣サへ返シ玉フ御心中コソ貴ケレ」トテ泣給へり。

(大谷大学蔵本『恵心僧都縁起』、傍線筆者)

と、他本では母と別れて「七年間」対面できなかったと歎くのに対し、大谷大学本では

：僧都声打上てのたまはく「有難し。我母は普通の女人にてはまします。権者にておはしけり。親と成て子を思ふ道、鳥類等に至まで類ひなき物そかし。七歳の時別奉て今迄九年の間互対面なければ、進てこ

そ見給ふへきに、かくまできひしくのたまひて、返事にも預からず、御衣までも返し給へる御心底貴く覺ゆる。」とて袂もしほる斗に見え給ふ。

(大谷大学蔵本『恵心僧都物語』、『駒沢国文』二二号、二二九頁、傍線筆者)

とあるように、「九年の間」としている。このように大谷大学蔵本と他本が異なる部分については、「直談」にまったく見えていない。

さらにまた、これもすでに指摘されている点だが、大谷大学本にはいくつか異本をもつて補ったあとがみられる。

：抑恵心僧都トマフスハ、日本第一ノ学匠又ハ道心者ナリ。一切経七千卷ヲ披キ見玉フ事五度也。諸経ノ中ヨリ、罪悪生死ノ衆生往生スヘキ要文ヲ撰取往生要集三卷ノ鈔ヲツクリ、アマ子ク我朝ニヒロメ唐土ニ渡シ玉フ。カンチウノ天子一人三公ヨリハシメテ貴僧高僧道俗男女皈依カントンシテ、靈木ヲ撰テ五十二間御堂立カノ要集ヲ本尊トシテ、月ノ六斎ニハ貴賤道俗集リ此文ヲ聴聞スル時、ヨノノマツ日本ニ向テ「南無源信如来」トトナヘテ三度フシオカムト云々。未タ有凡夫僧躰ニ異国ノ諸人ニ万徳円満ノ仏号ヲ称セラレ玉フハ我朝此ノ恵心ノ僧都ハカリナリ。父母ノ遺言ヲタ

カハス孝養フカク存シ、母ノ慈念深クシテ仏道ノ本意ヲトケタル先蹤コノ叟ニキワマレリ。已上異本ノ文

(大谷大学蔵本『恵心僧都物語』、『駒沢国文』二二号、二二六頁、傍線筆者)

右は大谷大学蔵本において、『往生要集』が唐に送られた地の尊崇を受けたという部分を異本によって補った部分だが、傍線部では「カンチウ」すなわち「漢朝」の天子をはじめとする諸人から帰依を受けた、とするのに対し「直談」では以下のように「宋朝」としている。

…二十四歳ノ時、伊勢天照太神宮ニ参籠アリテ、濁悪不善ノ人ノ出離生死頓證菩提ノ法ヲ祈玉ヒケレハ、七日満ツル夜ノ寅ノ時、貴女示現シ玉ヒテ、末代ノ出離生死ノ法ハ、念仏ニシクハナシト告玉ヒ、搔消コトクニ失玉ヘリ。恵心告命ヲアリカタク思ヒ、濁悪不善ノ人ノタメニハ、念仏往生ノ要文ヲ集メント如来一代教ノ中ヨリ、念仏滅罪ノ明文ヲ撰ミ玉ヒ、往生要集三巻編玉ヘリ。是故ニ沙門源信撰スト書玉フナリ。

扱此要集ヲ唐土ヘ渡シテ、大唐ノ人ニ念仏往生ヲ勧給ヘリ。宋朝ノ天子、要集ヲ見玉ヒ、斯要集ハ往生ノ本尊也ト尊敬シ玉ヒ、日本ニ向テ南無源信如来ト唱玉ヘリ云々。

(引用は大谷大学図書館蔵本、句読点・傍線筆者)

『直談』がこの際に用いられた異本であったとも想定できるが、本文を比較するとその可能性は低いと思われる。これらの点からしても、大谷大学蔵本と『直談』が直接交渉したとは考え難い。したがって、この二書をつなぐ経路については別に想定する必要があるだろう。ただし、先にも述べたとおり、【B】系統の『恵心僧都物語』が真宗と深く関わって伝承された可能性は何度も指摘されている。そして『往生要集義記』や『往生要集和解』など他の注釈書が浄土宗の立場から書かれたものであったのに対し、『直談』は真宗僧の手によって著されている。著者である羊歩は、本願寺派の僧侶で寛永初年に遁世し、念仏を修する一方で禅にも深い興味を示した。著書としては、『大原談義再三鈔』(明暦元年刊)、『正信偈科鈔』(承応三年刊)、『真宗九表記』(寛文九年刊)など、数々の教義書が挙げられる。このこともまた、源信の母に関する説話が真宗に深い関わりを持ちつつ伝えられてきたことのひとつの証左となるのではないか。同時に、この和歌自体も真宗内で伝承されていた可能性が高いと思われる。

#### 4. 人間的な高僧像の形成

近世において殊に真宗に関わりを持ちつつ伝承された源信の説話は、特に母への深い追慕と、信仰に対する熱い情熱が描き出されたものであった。このように高僧が様々な葛藤を乗り越え、人間としていかなる生涯を送ったのかという問いは、この時代、宗派を超えて多くの人々から発せられていたのかもしれない。『往生要集』の注釈書は他宗派からも多数出版されたが、比較的早い時期に浄土宗から刊行された『往生要集指磨鈔』などが『元亨釈書』や『仏祖統記』などの歴史的史料をもとにして源信の事跡を辿るのに対し、それ以後に出された『往生要集和解』では基本的に伝記的史料に加え、辻占に往生を問う話（『浄土厭欣集』）、金峰山の巫女に心中の祈願を問う話（『故事談』巻三）、『千載集』や『新古今』に詠じられた和歌など、多数の説話集や歌集を引用している。それらは必ずしも高貴で神秘的な宗教英雄としての姿ではなく、時として愚直なまでに道を求めていく一人の人間としての源信を描き出しているのである。

25 (北城) 注釈書に限らず、時代を経ていくにつれて源信伝そのものも多くの俗伝的な説話を採録するに至る。これまでそう

した現象は僧伝の俗化、ひいては近世仏教の墮落という一面的な見解しか提示されてこなかったが、むしろ筆者はこの時代の僧伝が人間として重層的で魅力に満ちた像を示していくことで多くの在俗の徒の共感を獲得し、新たな聖性を形成していったと捉え返したい。

幕末に天台真盛派の総本山である西教寺から版行された『恵心僧都絵詞伝』（慶応二年刊）は源信の八百回忌にあわせて編纂されたものだが、ここには『本朝高僧伝』や『扶桑往生伝』とともに、多数の説話集から俗伝が紹介されている。そのなかにはやはり、源信と年老いた母とのやりとりが次のように見えているのである。

僧都公請の度ごとに得給ひし。被物のかずく取そへて。老母のもとに贈り給ふとて。一天の君恩賜の御衣なりと。文にて申進じ給ひければ。老母之を見てさめぐと泣給ふ。嬉しさの余りかと思ふに。良ありての給はく。贈らるゝ志しはうれしけれども。山林苦行こそ元よりわが願ふ所なれ。法師の子をもてば後世までもたのもしと思ひしに。愚なる女人に信施物をおくり。地獄の業を重給はんものとは。夢にもおもはざりしものをと。いひもはず泣給ひて。御衣をそのまゝかへし給ふ。御使の人かへり来て。具に事のよしを申

しかば。僧都老母の意のたふとさ心肝にそみて。僧都も是より後は。雲の八重たつ横川の水に心すまして。ひとへに浄土の業をはげみ。上求菩提の志しふかく下化衆生のおもひ切なり。

〔恵心僧都絵詞伝〕巻上、引用は『恵心僧都全集』第五巻、七〇一頁による。)

この話は、『天台山恵心院源信法師伝』(『東国高僧伝』)や『江州叡山沙門源信伝』(本朝高僧伝)といった伝統的な形式に沿って編纂された僧伝においては、俗伝として退けられていたものであった。ところが徳川末期に至ると、そうした俗伝的な説話が、言ってみれば一宗の公式見解として刊行された高僧伝へと組み込まれていく。ここに、近世中期と後期においての僧伝の質的な変容を見ることが出来るよう。繰返しになるが、このような変化を僧伝の俗化という単純な方向性で捉えるべきではなく、むしろ高僧に対して人間的な暖かさや激しさを求めていこうとした人々のまなざしが、こうした変容をもたらしたことに注目し、改めて近世仏教の有りようを考えていくべきであろう。信仰に対する熱い想いと、肉親への恩愛を描く源信と母の説話は、時代的な大きなうねりのなかで次代へと語り継がれていくのである。

〔未完〕

註

- ① 富士昭雄氏「仏教説話の終焉」(『日本の説話』五・近世、東京堂出版、一九七五年)。
- ② 近世の仏教説話に関しては、堤邦彦氏や西田耕三氏、後小路薫氏、和田泰幸氏らによる一連の御論考が備わる。
- ③ 西尾実氏(『中世的なものとその展開』岩波書店、一九六一年、八十三頁)。
- ④ 西尾光一氏(『中世説話文学論』塙選書二十八、一九六三年、二三〇頁)。
- ⑤ 宮崎圓邊氏「源信和尚の別伝について」(『中世仏教と庶民生活』、平楽寺書店、一九五一年、後に『日本名僧論集 第四卷 源信』吉川弘文館、一九七八年に再録)のなかで、『恵心僧都縁起』(寛文四年刊)、『恵心僧都行状記』(元禄三年成立、西福寺慧空作)、『横川僧都源信和尚行実』(享保三年、白道恕哲撰)、『源信僧都伝』(明和二年刊、玄智編『浄土七祖伝』巻三)、恵心僧都絵詞伝(慶応二年刊、法龍撰)の五種を紹介される。尚、このうち寛文四年刊『恵心僧都縁起』は刊記や内題から、後に記した『恵心僧都物語』諸本一覽』のうち、【B】系統【二】刊本⑩と同じ系列に属し、さらに『恵心僧都行状記』は外題、成立年から⑫と同じものを指すかと思われる。
- ⑥ I(史伝的なもの)

『天台山恵心院源信法師伝』(『東国高僧伝』巻六)、『江州叡山沙門源信伝』(『本朝高僧伝』巻十)、『横川僧都源信和尚行実』、『恵心僧都絵詞伝』

Ⅱ (七高僧伝の一部として編纂されたもの)

『源信僧都伝』(『浄土七祖伝』巻三)、『源信僧都伝』(『三國七高僧図会』本朝之巻)

Ⅲ (母との交流を主題とするもの)

『恵心僧都縁起』、『恵心僧都行状記』

⑦ 松本隆信氏「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(奈良絵本国際研究会議編『御伽草子の世界』、三省堂、一九八二年)

⑧ 黒田彰氏「三國伝記と恵心僧都物語——説草から説話集へ——」(『説林』一九八九年)、中世説話・絵巻研究会「翻刻恵心僧都物語(大谷大学蔵)」(『駒沢国文』二二号、一九八四年)。これらの先学諸氏がすでに報告された諸本と新出資料を一覧にすると、次のようになる。

『恵心僧都物語』諸本一覧』

【A】恵心僧都絵巻

(1) 国立国会図書館蔵本(応永八年(一四〇一)奥書本の模写絵巻(『室町時代物語大成』三 所収))

(2) 妙法院蔵本(同右模写絵巻(『大日本史料』寛仁元年六月十日条 所収))

(3) 藤井隆氏蔵本(同右奥書写本(『未刊御伽草子と研究』

四 所収))

【B】恵心僧都物語

〔一〕写本

(4) 法隆寺蔵本(天文十一年(一五四二)写本)

(5) 慶応大学蔵本(室町末期写本(『室町時代物語大成』三

所収))

(6) 国会図書館本(寛永十一年(一六三四)写本)

(7) 岡田真氏旧蔵本(室町末期写本)

(8) 大谷大学蔵本(江戸中期写本)(『駒沢国文第』二二号

(昭和五十九年二月) 所収))

(9) 高野山金剛三昧院蔵本(写本(『大日本史料』寛仁元年六月十日条 所収))

(10) 大分県専想寺本『恵心僧都事』(文明三年(一四七二)写本)(『宗学院論集』四九号(昭和五十四年三月) 所収))

(11) 妙法院蔵本『恵心僧都御房形状記』(文禄二年(一五九三)写本(『続天台宗全書』史伝部二 所収))

(12) 滋賀県善立寺本『恵心僧都形状記』(元禄三年(一六九〇)写本(『真宗史料集成』五 所収))

(13) 大谷大学蔵本『恵心僧都縁起』(寛永十一年(一六三三)写本)

(14) 大谷大学蔵本『恵心僧都形状記』(元禄期写本力)

〔二〕刊本

(15) 慶応大学蔵本(寛文四年(一六六四)長谷川市郎兵衛刊絵入本(『室町時代物語大成』三 所収))

⑨ 今回筆者が新たに確認した一本は、右の一覧【B】の系統に属する(13)大谷大学蔵本『恵心僧都縁起』である。簡単な書誌の事項を記すと次のようになる。

大谷大学図書館所蔵 楠丘文庫 余大八一一五

内題『恵心僧都縁起』外題なし 写本 袋綴 一冊 二十丁  
二十一・一cm×十三・九cm 改装(原装 縹色無地表紙)

また『恵心僧都物語』諸本一覽のうち、(14)『恵心僧都形状記』は、早く宮崎円遵氏によって紹介されていたものの、その後所在不明とされていた一本である。今回再確認したところ、大谷大学図書館に所蔵される『太子講式 四十一箇條 恵心行状記』(外題)であることが判明した。合綴されている『四十一箇條』の本文末尾に「私云先師自筆ノ本ヲ以元禄十一戊寅曆、伝写スル者也」とあるため、この前後に書写されたものであろう。内容的に他本と大きく異なるものではない。

⑩ 中世説話・絵巻研究会論文、二二九頁。

⑪ 中世説話・絵巻研究会論文、二一五頁。

⑫ 宮崎圓遵氏「源信和尚に関する中世の談義本」(『宗学院論集』第四十九号、一九七九年)。

⑬ 中世説話・絵巻研究会論文、二二七頁。

⑭ 特に大塚あや子氏は、室町以降流布した源信と地獄の説話の展開背景に、天台宗真盛派の教化活動があったとされる

〔源信話考——作仏聖としての伝承をめぐって——〕『立正大学国語国文』二五号、一九八九年)。

⑮ 宮次男氏「近世の往生要集と版本」(『解釈と鑑賞』第五十五卷八号、一九九〇年八月)。

⑯ 中世説話・絵巻研究会論文、二二六頁。

⑰ 中世説話・絵巻研究会論文、二二六頁。

⑱ ちなみに各本との異同を表にすると次の《表I》のようになる。

《表I》

御八講を勤めた年齢	なし	〔直談〕	他本
源信が母との対面を許されないことを歎く言葉	なし	〔13大谷本〕十五	〔13大谷本〕
恵心僧都が父母の菩提を祈るため十二年の籠山を行う場面	なし	〔今年九年の間互対面なれば〕	〔今年七年〕
故郷へ向う途中受取った姉からの手紙に書かれた母の年齢	なし	〔誦経座禪の床の上には一乗の実相の霜さへて〕	〔慶応本〕
恵心の母の往生年および年齢	なし	〔永寛二年〕〔七十二〕	〔慶応本〕〔寛和元年〕〔慶応本〕〔七十九〕

⑲ 中世説話・絵巻研究会論文、二二六頁。

〔元本学任期制助手 国文学〕  
〈キーワード〉高僧伝、近世説話、往生要集